



と き 目の前に現れたその瞬間

市内在住の廣 秀夫さん(73)。廣さんは狩猟を趣味とし、その日も仲間とともに鹿を追って山に入りました。そのときに、体験した出来事をご紹介します。

平成11年11月23日。この日は、鹿の狩猟を目的に前日から仲間2人とともに、新得町に宿泊していました。

私は、仲間2人を山の下に待たせ1人で山の中に入ると、鹿を追いたすために大きな音を立て山の様子をうかがいました。すると、背後の草木がガサガサと音を立てたため、振り返ってみると、そこに一頭のヒグマが姿を現したのです。ヒグマは私の姿を見ると慌てて山奥へと逃げて行きました。私は無線で仲間ヒグマの存在を知らせ、山へ上がるよう伝え、すぐに逃げた方向にヒグマを追いかけて行きました。

必死になって追いかけると、気付けばそこは深いやぶの中。「これはまずい...」と思い、仲間ヒグマを追うことを断念すると無線を入れ、引き返すことにしました。しかし、戻る途中の林道で真新しいヒグマの足跡を発見。狩猟本能に火が付いた私は、ライフルに弾を込め、再びヒグマの足跡をたどって、やぶの中へと入ってしまいました。鹿を仕留めるために入ったはずが、いつの間にかその標的を変え、私は先ほど目にしたあ

の巨体を必死に追いかけていました。

やぶは、辺りの様子が分からないほど生い茂っていました。周囲を見渡し、「これは見づらいな」と思ったその瞬間、やぶの中で身を潜めていたヒグマが、突如、私の目の前に姿を現し襲いかかってきたのです。

私はとっさに、ヒグマを目がけて2発の弾を打ち込みました。しかし、ヒグマはびくともしません。それどころか、勢いを増したように両腕を私の背中に回し、覆いかぶさるような体勢で私はヒグマの胸元に抱き込まれてしまいました。163cmの私に対し、相手のヒグマは立ち上がった高さが150cm、160cm。目の前にある大きな口は何度も私の顔や頭にかじりつきました。私も必死になってヒグマの顔を両手で押さえ、抵抗し続けました。

そのころ仲間、私が下山をする

と連絡をしたにも関わらず、山中から銃声が聞こえ、状況を伝える新たな無線連絡もなかったため、何かあったのではないかと異変を感じ、私のもとに向かってくれていました。

どれほどの時間が経過してい

たのでしょうか。何分いや、何十秒だったのかも知りませんが、ヒグマとの格闘はとても長い時間を感じました。そのとき、今まで暴れていたヒグマが突然私の目の前で倒れたのです。一瞬、何が起きたのか分かりませんでした。先ほど打ち込んだ2発の弾がようやくヒグマに効いたのだと分かりました。「あ...生きて帰れる」とう思いました。

私の目には大量の血が流れ込み、視界はぼやけた状態でしたが、後からきた仲間息絶えたヒグマを託して、私は何とか下山することができたのでした。その後、すぐに近くの病院へ行き、大がかりな処置が施されたのは言うまでもありません。

あれから20年以上の時間が経過しましたが、今もなお顔や腕には大きな傷痕が残っています。今思えば、あのとき無理な行動を取らなければこれほどの大きな代償を受けることもなかったと思います。昨年ハンターは辞めてしまいました。あの恐怖の出来事は、きつことこの先もずっと忘れることはないと思います。



もっと ヒグマを知って 事故を防いこう

重要なのは「ヒグマに遭わないこと」

私たちが被害者にならない一番の方法は「ヒグマに遭わないこと」です。ヒグマは基本的に人を避ける動物ですが、ヒグマの生息地である北海道では、いつ、どこで遭遇するかわかりません。また、登山や釣り、山菜採りなどで人間がヒグマの生活区域に足を踏み入れている場合もあります。ヒグマとの遭遇や事故を防ぐためにも、ヒグマの生態をよく理解して行動するようにしましょう。

ヒグマの1年

ヒグマは春になると冬眠から目覚め、野山で活動を始めます。フキやセリ科の草、山菜などを採って食べます。子どもを産んだメスは5月に入るまで、冬眠穴からあまり離れません。5月ごろから繁殖期に入るため、オスはメスを求めて活発に動くようになります。そのため



普段ヒグマが生息しない地域にも出没することがあります。このころから夏にかけては、フキなどの植物以外にアリなどの昆虫も食べるようになります。秋になると、冬眠に備えてどんぐりや果実、サケやマスなどたくさんのお餌を食べて栄養を蓄えます。冬は冬眠をします。山の斜面などに掘った穴にこもり、絶食・無排泄で過ごします。冬眠中は体温が通常より4〜5度下がり、心拍数も5分の1程度と、消費カロリーを節約しながら冬をしのいでいます。妊娠中のメスは冬眠穴の中で1〜3匹の子グマを出産をします。

被害を防ぐために

ヒグマによる人身被害や農業被害の発生は、必ずしも個体数の多さとは比例しません。広い行動圏と鋭い嗅覚を持つヒグマは、人間の生活区域で放置された農作物や果樹、残飯などによって誘引されることがあります。ヒグマの生息域である野山では、さらに人間側が守るべきルール、野山に入るための責任ある行動が求められます。

野山でヒグマに遭わないためのルール

- 食べ物やごみは必ず持ち帰る
- 一人では野山に入らない
- 野山では音を出しながら歩く
- 事前にヒグマの出没情報を確認する
- 薄暗いときには行動しない
- フンや足跡を見たら引き返す

ヒグマとの共存

道内ではヒグマによる人身被害が毎年のように発生しており、時には痛ましい死亡事故になることもあります。こうした事故は、ヒグマにおいても不幸なことです。本来ヒグマは森の奥深くに生息していますが、周辺の山に餌が不足していると、餌を求めて人里近くに出ることがあります。道では今年、全道的にどんぐりなどの木の実際の生育状況が悪いため、ヒグマが例年よりも市街地や農地に出没する可能性があるとして発表しており、冬眠に向け栄養を蓄えることからの時期にもまだまだ注意が必要です。

普段、私たちが目にするヒグマは動物園などで飼育されているため、人にも慣れ愛くるしい姿をイメージしますが、野生で生きるヒグマ本来の姿は決してそうではありません。

森を開発・利用してきた私たち人間は、もっとヒグマの生態を理解し、山や人家近くに誘引するおそれのある食物残さを放置しないこと、目撃情報があった場所には立ち寄りしないことなど、地道な取り組みを続けていくことが、共存への道につながるのではないのでしょうか。

私たちの日常を守る取り組み

目を光らせて 監視中!

今年、市内での目撃情報が多発したため、実証実験を兼ねて「モンスターウルフ」を設置。声や音でヒグマを寄せ付けません。この効果は今後検証していく予定です。



▲市内に設置した「モンスターウルフ」

地域を守ることも 私たちハンターの使命です



滝川ハンタークラブ会長 鈴木 英光さん

会員募集中です!

滝川ハンタークラブ事務局 <南部土地株/Tel.22-3465> 担当:高橋

私たち「滝川ハンタークラブ」は、現在会員数36名で活動をしています。基本的には会員の多くが狩猟を趣味として活動していますが、私たちはヒグマの出没情報により出動要請があったときは急いで現場へ向かうこととなります。当然、危険を伴う事もありますが、それが資格(狩猟免許)を与えられた私たちの使命であり、こうした活動が少しでも地域への貢献にもつながればと考えています。

年々、会員数は減少傾向にあります。いざというときに地域の安全、市民の命を守れるよう、この会を維持していきたいと思っています。

【特集】ヒグマとの共存について考える ヒグマ出没注意! おわり